

# 対話を積み重ねて理念を共有 全教員で「世界標準」と銘打つ 教育の実現を目指す

学校現場で  
カリマネはどのように  
取り組まれているか?

Challenge Report 3

## 三田国際学園高校 (東京・私立)

生徒のためにどんな教育をしたらいいかを話し合い、ミッションや思いを全教員で共有する。そのことを何よりも重視し、粘り強く取り組み続けている学校の事例をご紹介します。

取材・文 / 松井大助



一人1台タブレット端末を活用し、問いに対して生徒自身が考え、皆と議論する。それが授業の基本スタイルだ。



### 学校データ

1902年創立 / 普通科 / 生徒数  
441人 (男子134人・女子307人)  
／進路状況 (2015年度実績) 大学  
55人・短大2人・専修その他3人、そ  
の他4人

### 保護者や教員間で共有できる 教育デザインがなかった

三田国際学園高校は、2015年に戸板女子高校から改称し、新たなスタートを切った学校だ。中学校もある中高一貫校で、110年以上の伝統をもつ。その前身の戸板女子時代を知る佐藤充恵先生は、当時のことを「先生方皆で一生懸命やっていたのですが」と振り返る。でもそれが、生徒の意欲向上や周囲の評価にいまひとつ結びついていなかった。

そんななか、同校は2013年に、あ

る人物を理事に迎え入れる。同じく中高一貫校である広尾学園の改革に校長として携わり、任期を終えて退いた大橋清貴先生だ。翌年には学園長に就任。この大橋先生の着任を機に、学校は大きく変わっていく。

大橋先生が課題に思ったのは、この学校ではどんな教育をしたいのか、そのデザインが見えないことだった。

では教育デザインはどう描けばいいか。大橋先生がまず重視したのは、保護者との対話から得た指針だ。前任校時代、社会の第一線で奮闘する保護者との対話から「これからの教育に必要なもの」を感じてきた。

それをもって全教員と対話した。社会構造の変化の話も交え、保護者の声を共有。「正解が一つではない時代に、生徒たちのために学校は何をすればいい？」と先生に問いかけた。

こうした対話を経て、学校の教育目標が改めてまとめられていった。

創立時の理念「知好楽」※を大事にしよう。変化の激しい時代だから「発想の自由人」にならなければならない。学校に何かしてもらうだけでなく、自分も皆の学びに「Contribution(貢献)」してほしい。そうした理念を叶えるために、世界標準の教育と銘打って「英語」「コミュニケーション」「サイエンスリテラシー」「ICTリテラシー」「考える力」を伸ばそう(26ページ 図1参照)。

思い描いた教育目標を実現するために、学校の組織、教育カリキュラム、そ



大橋先生は保護者や生徒にも、学校にもらうだけでなく、自分も学びに「Contribution(貢献)」することを呼びかけている。

して授業の在り方も見直した。

女子校から共学に舵を切ろう。英語・サイエンスを重視したスーパーイングリッシュコース(SEIC)とスーパーサイエンスコース(SSC)を新設しよう。「考える力」や「コミュニケーション」を育むために「相互通行型授業」を、「ICTリテラシー」を伸ばすために「生徒が一人1台タブレット端末を活用する授業」を推進しよう。

### 教員同士で対話をくり返し どこに向かうかを明確に

対話によるとはいえ、大橋先生を中心にまとめられたこうした方向性に、全員がすぐ納得できたわけではない。職員会議では、その教育で大丈夫か、本当に共学にするのか、といった声が相次いだ。そうした先生に大橋先生は「多様性を受け入れることが求められ

※知好楽……孔子の教えに由来する言葉で、「人生に於けるすべてのことは知ることから始め、それを好きになり、最後に楽しむ境地に至ったときにこそ、初めて自分のものになり、豊かなものになる」という考え方。

三田国際学園高校 近年の動向

- 2013年度 ●大橋先生、学園理事に就任  
全教員と面談、学校の理念やこれからの学校教育のあり方について思いの共有を目指す

違う意見の教員と対話



- 全教員参加の教職員研修スタート
- 次年度からの「スーパーサイエンスコース」「スーパーイングリッシュコース」開設に向けて、「本科コース」も含めて、各コースのミッション(使命)を教員間で議論・共有

- 2014年度 ●戸板女子高校からの校名改称・共学化決定  
●大橋先生、学園長に就任  
●田中先生が着任、学習指導部部長に  
価値観などを共有する年間48時間の研修制度構築

負担に感じた教員と対話



- 外部広報+教員バイブルを目指した学校パンフレット作成
- 先生全員がタブレット端末を使いこなせる体制を目指す

- 2015年度 ●三田国際学園高校に改称、共学化スタート  
●教員研修でルーブリック(学習の評価観点)の作成  
教育理念「知好楽」にもとづくメタルーブリック作成  
それをもとに各教科のルーブリックを試案、全教員で共有  
●三田国際学園としての第1回学園祭を開催  
●教育用デジタルコンテンツの管理システムの本格運用



- 2016年度 ●教員研修で教科横断(クロスカリキュラム)の授業を模索  
●既存の学校行事を活用し、生徒が観光客の日本誘致のためのプレゼンをするプログラムを計画

る時代だから共学にしたい」などとさ  
らに対話を重ねた。

大橋先生はまた、先生同士にも対話  
を求めた。自分たちのミッションは何か、  
そのためにどんな授業をしたいか、教  
科ごとに根本から議論してもらったの  
だ。例えば佐藤先生をはじめ理科の先  
生は、SSCの教育課程や授業モデル  
を中心に考えてきたが、その作業は、  
ミッション実現のために何が必要かを  
皆で落とし込む形で進められた。

「サイエンスリテラシー」を伸ばすとい  
う学校方針のもと、SSCのミッション  
として掲げたのは、「研究者たる姿勢  
を育むこと」。どうすればその姿勢が  
育つかを議論するなかで、「先端的な

研究にふれさせたい」という方向性が  
決まり、そのためにどんな設備を揃え、  
どう使うかまで話が及んだ。また、「研  
究者としてどう行動すべきか、生徒自  
身に考えてほしい」という思いを共有し  
たことで、サイエンスの社会への影響を  
よく知る科学者などを講師に招き、生  
徒が課題と一緒に考える、という特別  
講座の開設も決まった。

そのように、まずは目標を共有し、  
実現の手立てまで皆で考えたことが、  
良かった、と佐藤先生は感じている。

「それでも皆一生涯懸命でしたが、ど  
こに向かっているのかはよくわかりませ  
んでした。それぞれ自分のなかで生徒  
に大事だと思うことをやっている感じ

で。ですが、対話を通して、全員でどこ  
に向かうのか、そのために自分は何を  
がんばればいいのか、わかりやすくなっ  
たんです。価値観を共有して『皆でやっ  
ている』と思えるようになりました」  
(佐藤先生)

考えを主張し合い、  
思いを共有する研修を強化

もつとも、それぞれの先生には長年  
培った授業スタイルや学習観がある。ミ  
ッションを共有し、教育カリキュラムや  
授業モデルを再構築したとはいえ、表  
面上は同じでも目指す方向性に食い違  
いが出てくることはあるものだ。

そこで大橋先生は、進路・学習指導

部という校務分掌を進路指導部と学  
習指導部に分割。このうちの学習指導  
部を「21世紀型の世界標準の教育につ  
いて勉強し、校内に推進する部署」と  
位置付けた。そして他校で教務・研修  
分野で実績のあった田中潤先生を部  
長に抜擢。各先生の取り組みの方向性  
が四散せず、相乗効果を上げていける  
ような仕掛けを求めた。

田中先生は、夏休みや冬休み、春休  
みに全員参加で行う約48時間の全体  
研修を柱に、年間の研修計画を構想  
する。この48時間の全体研修の話を受  
けると、他校の先生からは「うちでは受  
け入れられそうにない」と言われるそ  
うだ。実際、田中先生も反発を受けた。  
個別に先生の反応を探ったとき、ある  
教科主任から「なんでこんな大変なこ  
とをしなきゃいけないんですか!」と返  
されたのだ。

「でも、僕はそうやって主張し合うこ  
とは、新しいものをつくるうえで大切  
だと思っんです。進んで対立はしたく  
ないですが、対立を悪いものとは思わな  
いようにしています」

異議を唱えられた田中先生は、「何  
のために研修をやるのかという『目的』  
を先生たちと共有できていなかった」と  
反省した。そこで職員会議を開いて  
もらい、「目的を共有せずに研修をやる  
ことを優先して申し訳なかったです」  
と謝り、改めて研修にかける思いを訴  
えた。田中先生が全体研修の目的に見  
えさせたことは何か。

図1 三田国際学園高校の考える「世界標準」の教育



左の図は、三田国際学園高校が「ただひとつの正解などない、めまぐるしく変わる時代」だから、生徒たちのために学校でこうした力を伸ばしたい、として掲げている5つの力。同校はこの5つの力の言葉やイラストを、「知好楽」「相互通行型授業」といったキーワードとともに、学校案内のパンフレットや、説明会用の資料、ホームページなどで広く発信している。ちなみに、学校案内のパンフレットを制作するときには、受験生をはじめ外部の人に参考にしてもらうことだけを目指したのではなく、校内の先生たちが自分たちのミッションを再確認できるように、いわば先生たちのバイブルとしても使えるパンフレットになるよう、最初から意識して作ったという。

「スキルをみがぐることよりも、価値観や思いをシェアすることです」

だから全体研修では、毎回、学園長が全教員にビジョンを語る時間を設けた。そのうえで「相互通行型」を基本とする模擬授業とディスカッションを実施。授業の工夫をシェアするとともに、各自が方向性にズレがないか確認し、授業改善をしていけるようにした。教育トピックを少人数で議論し、グループごとに発表して共有もしている。今後の教育課題にどう取り組むかも、皆で一緒に考えるためだ(図2参照)。

「一人ひとりがスキルをみがいても、目指している方向がバラバラでは学校として前に進めない」と職員会議でも延々と話しました(田中先生)

職員会議の熱弁後、田中先生と主張をぶつけ合った先生は「自分も研修の目的を理解しようとしていなかった」と自ら歩み寄ってきてくれたという。

**▼ 分掌の部長や教科主任が先生の思いを吸い上げる**

研修以外でも、対話をベースに思いを共有する環境が整えられていく。

毎週月曜日には、校務分掌の部長が集まる運営会議を実施。その会議に向けて、土曜日までに各部門が話し合いたい課題をあげておくようにし、それに対して意見をもちよることで、話が空転することなく、中身の濃い議論ができるようになった。

そのなかで、「共学」の方針は決まっ

たものの、女子校の経験しかない先生には、はじめて接する男子生徒への不安が強いことが見えてきた。そこで全教員で、性別も年齢も教科も学年も混ぜて「男子のこんな事案にはどうするか」を話し合うワークを実施。対応策をシェアして、男子生徒に向き合う学校としてのスタンスを形づくった。

授業への思いの共有では、学習指導部と各教科主任が議論をリード。その教科主任には、ほかの先生から課題を吸い上げることや、これからの授業の考え方や手法を率先して学ぶ姿勢が求められるようになった。

例えば理科主任となった佐藤先生は、日々の先生との立ち話から、週1ペーシスの教科会、節目の研修を通して、理科の授業の課題を洗い出し、改善することを皆と進めている。

「SSCの授業では『発想の自由人』になれるよう、生徒が個々に自分の興味を掘り下げる研究活動を進めてきたのですが、モチベーションに個人差が出る課題が見えてきました。今は、グループ活動を増やすことで全員のやる気を高められないかを、検討しています」(佐藤先生)

学習指導部が教育理念「知好楽」にもとづくメタルーブリック※を提示し、「冬の研修ではこれをもとに各教科のルーブリックを作成したい」と事前告知した際は、佐藤先生はルーブリックについて下調べし、土台となる情報を他の先生と共有する役目も担った。

「教科会でも研修でも、みんなの視点が全然違うまま1から議論すると、話がいろいろと散ってしまいます。ですので、まずは自分で調べたり、個別に先生と意見をすり合わせたりして、『こんな観点から考えてみませんか』というのをある程度示していけたら、と思っています」(佐藤先生)

図2 春・夏・冬に行う教員研修の主な内容

- 学園長プレゼンによるミッションの共有・再確認
- 大学入試問題をもとにしたペーパーテスト(教員の知識向上と入試研究が目的)
- 模擬授業およびディスカッション
- 各回ごとに全教員で学びたいテーマを議論  
例)2014年夏 「よい教師の条件とは」  
2015年冬 「ルーブリック」  
2016年夏 「カリキュラム・マネジメント」

**▼ 生徒と保護者と先生みんなで形づくる学校に**

一連の変革で、先生たちは皆、未知の分野に待たなして挑戦することにな

「専門家から教わるより、そうして自ら学ぼうとする同僚から投げかけられたいが、先生たちも自分ごとにとらえやすい。夏の研修では白熱した議論が交わされ、先生たち合作による各教科のルーブリックが完成した。

※メタルーブリック……ルーブリックとは、生徒のどんな資質を伸ばしたいか、それらがどこまで到達したら段階的に評価するか、といった学習評価の観点を表にまとめたもの。各教科の先生が独自に作成することが多いが、メタルーブリックとは、それらの個別のルーブリックの元になるような、より抽象度の高いルーブリックのことをいう。



理科主任  
佐藤 恵先生



学習指導部長  
田中 潤先生

周りの見る目も変わった。受験者が大幅に増え、校名を改称した2015年には外部進学者200名が加わり、高校の1学年が2クラスから7クラスに拡大。学校説明会では保護者から「大学入試の先を見ずえた教育を探していた」と共感の声をもらえるようになった。その説明会では、アンケートを毎回実施している。学校が目指す方向性と、保護者の認識にずれがないかチェックするためだ。

「今までのものを全部壊して新しいものを始めるスクラップ&ビルドでは、皆大変ですし、これまでの学校の良さがなくなりません。そうではなく、さまざまな木材を組み合わせて形づくる組木細工のように、今ある素材を生かしていきたいんです。ミッションを共有し、そこに向けて先生方のもつ暗黙知やこの学校にある資源をうまく組み合わせること、ほかにはない特色をつくっていきたくと思っています」(田中先生)

その生徒たちは、「相互通行型授業」になじんできて、自分の考えをよく主張するようになった。タブレット端末で仕上げた企画書を手に、学園長に「学園祭でこんなことをしたい!」と直訴する生徒まで出てきたという。

昔からあった伝統芸能鑑賞や鎌倉遠足という学校行事にも着目。そこで生徒が日本の良さを探究したうえで、旅行会社や観光学部の大学生と組んで、シンガポールで観光客誘致のプレゼンに挑む、という「考える力」や「英語」を鍛えるプログラムに再設計した。

先生同士で思いの共有を進めてきたことで、学内の共通語が増え、授業設計などで意見が割れたときに立ち返るポイントも明確になった。「発想の自由人」や「Contribution(貢献)」という言葉は、先生のあいだで浸透し、今では生徒も口にする。

「知好楽」に準拠した各教科のルーブリック作成により、複数の教科で共通して育みたい資質が見えてきた。それをもとに教科横断型の授業を開発、さらなる学びの相乗効果を狙っている。各先生がつくった教材をICTのシステムで共有し、ほかの先生がカスタマイズして活用したり、ブラッシュアップしたりする取り組みも進行中だ。

「ICTリテラシー」を育むべく、先生全員もタブレット端末を使いこなす体制を目指したこと。不得手な先生は、年代を越えて他の先生に質問するようになった。そこから「わからないことは先生同士で聞き合う」文化が前に根づいたのだ。

現在、目指していることは、先生たちやこの学校が元からもついている力を、さらに結集させることだ。

「ICTリテラシー」を育むべく、先生全員もタブレット端末を使いこなす体制を目指したこと。不得手な先生は、年代を越えて他の先生に質問するようになった。そこから「わからないことは先生同士で聞き合う」文化が前に根づいたのだ。

現在、目指していることは、先生たちやこの学校が元からもついている力を、さらに結集させることだ。

**共有したミッション目指し  
学校の資源を組み合わせる**

三田国際学園高校のカリキュラム・マネジメント概要

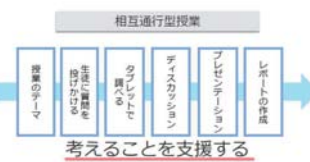
教育目標

創立時からの教育理念である「知好楽」の実現／学びに「Contribution(貢献)」する姿勢の会得  
 ⇒そうした理念をこのグローバル時代に実現するための「世界標準」の教育を行う  
 ⇒「世界標準」の教育＝「英語」「コミュニケーションスキル」「サイエンスリテラシー」「ICTリテラシー」  
 「考える力」という有機的につながり合う5つの力を伸ばす

カリキュラムのPDCA



学校説明会では、社会の変化やそれを踏まえた教育理念を発信。アンケートを取り、認識にずれがないか確認



疑問→仮説→検証→結論の思考プロセスをたどる相互通行型授業を、各教科の先生で話し合って計画・実施

三田国際学園の考えるルーブリック			
楽好知 Custom Act Know	C3	C2	C1
	B3	B2	B1
	A3	A2	A1
	Recognition	Logical Thinking	Creative Thinking



教員研修で、教科ごとまたは教科を越えて、模擬授業およびディスカッションを実施。授業改善に役立てる

学校のルーブリック(学習の評価観点)をまとめ、各先生が各教科のルーブリックも試案。授業改善に活用

実行主体者・体制

学園長／学習指導部／運営会議(各分掌部長)／教科主任

学校全体の動き

- 全教員で「相互通行型授業」「タブレット端末を活用した授業」に挑戦
- 先生同士で対話し、学校教育および教科のミッションや評価観点を共有  
⇒わからないことに挑戦するなかで、先生同士で聞き合う文化が根づく

地域・社会との連携

- 「学んだことを社会でどう生かすか」まで、外部との社会人も交えて生徒が考える授業設計に
- 生徒が「地域や社会にアウトプットする場」として学園祭を重視